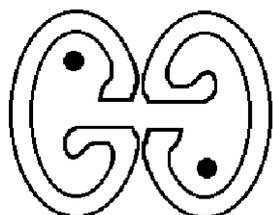


# 日本双生児研究学会ニュースレター

《第 39 号》



Newsletter of Japan Society for Twin Studies

2006 年 7 月発行

## 目次

日本双生児研究学会 20 周年記念にあたり	2
日本双生児研究学会第 21 回学術講演会のご案内	2
日本双生児研究学会 20 周年記念特別企画	
— 歴代会長が綴る双生児研究と日本双生児研究学会 —	3
今泉洋子	日本双生児研究学会の歴史
井上英二	ふたご研究事始め
岡嶋道夫	双生児の皮膚紋理を調べて 40 年
吉田啓治	日本双生児研究会との出逢い
詫摩武俊	1995 年—1997 年
天羽幸子	双生児と私
浅香昭雄	フランシス・ゴールトンと美人地図
平成 18 年度日本双生児研究学会幹事会議事録 (第 1 回、第 2 回)	14
日本双生児研究学会平成 17 年度会計収支報告、平成 18 年度会計収支予算案	15
次回研究会のお知らせ	16
編集後記	16

### 会員募集のお知らせ

入会を希望される方は郵便振替用紙に口座番号(00190-7-185311)、加入者名(日本双生児研究学会)をご記入の上、年会費 (3,000 円) をご送金下さい。また、通信欄に所属・所属の住所・電話番号・FAX 番号・E-mail 等をお書き添え下さい。

〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45  
慶應義塾大学文学部安藤研究室内  
日本双生児研究学会事務局

E-mail : [juko@msa.biglobe.ne.jp](mailto:juko@msa.biglobe.ne.jp)  
電話 : 03-3453-4511 [内線 23109]  
FAX : 03-5427-1578

# 日本双生児研究学会 20 周年記念にあたり

日本双生児研究学会長 今泉 洋子

この 20 年間における日本社会の著しい変化のひとつは少子化である。昨年の合計特殊出生率は 1.25 と発表された。本研究会が設立された 1987 年は排卵誘発剤と体外受精による多胎児出生率が急上昇した最初の年にあたる。三つ子以上の出生率の上昇は言うまでもないが、ふたご出生率も二卵性ふたごは 2 倍以上に上昇している。すなわち、少子化時代において、多胎児は増えており、それに伴う社会的な問題点も生じている。

本学会の会員は双生児研究者、双生児の親、双生児自身から構成されている。このユニークな学会のメリットが生かされ、会員である多胎児の親達と研究者達の協力による多胎児育児支援活動が行われ、社会に貢献している。また、本学会の会員らが中心になり石川県、岐阜県、兵庫県で多胎ネットが発足した。一方、双生児研究面においても、大規模な双生児研究がスタートしたり、国際誌への投稿数の増加、若い研究者達の育成など、学会としての役割も果たしていると思われる。また、1992 年には日本で始めて国際双生児研究学議を開催した。この数年のうちに、日本で 2 度目の国際会議が回ってくると思われる。

最後になりましたが、会員の皆様の益々のご活躍を期待しています。

## 日本双生児研究学会第 21 回学術講演会のご案内

【日時】 2007 年 1 月 27 日（土）9：45～17：00（予定）

【会場】 国立保健医療科学院 交流大会議室（予定）

〒351-0197 埼玉県和光市南 2-3-6 電話：048-458-6148

【プログラム（予定）】

9:00	受付開始	13:30~17:00	一般演題
9:45	開会	17:00	閉会（時期大会会長挨拶）
9:50~11:50	一般演題	17:30~18:30	懇親
13:00~13:30	総会		

【締め切り】 2006 年 11 月 6 日（月）（必着）

【送り先、およびお問い合わせ】

〒351-0197 埼玉県和光市南 2-3-6 国立保健医療科学院 研修企画部

（日本双生児研究学会第 21 回学術講演会大会事務局）加藤 則子 宛

電話：048-458-6148 FAX：048-469-0213 e-mail: kato@niph.go.jp

【一般演題（研究発表・報告）募集】

今回の学術講演会は、一般演題（各 15 分：発表 12 分、質疑 3 分を目安）の口頭発表を中心に構成し、1 つの会場のみで行うことを予定しております。育児支援関係のご報告も、この一般演題の中で行いたいと思います。多様な演題が多数寄せられますよう、みなさまのご参加・ご発表をよろしく願いいたします。

発表・報告いただける方は、演題名、発表者名、全員の所属および発表要旨（600~1000 字程度）を、A4 用紙 1 枚にまとめて、郵便またはメールに添付してお送り下さい。なお、発表時に使用できる機材は Windows マシンによる PowerPoint を想定していますが、それ以外の必要がある場合には申し込み時にお書き添え下さい。

## <20周年記念特集>

### — 歴代会長が綴る双生児研究と日本双生児研究学会 —

#### 日本双生児研究学会の歴史

今泉 洋子

##### 1. 日本双生児研究会の設立

1986年9月にアムステルダムで開催された第5回国際双生児研究会議総会にて筆者が副会長に選出された。そこで、総会後に開催されたバンケットの会場にて、日本から出席していた岡嶋道夫、浅香昭雄、中村 泉、早川和生、野中浩一（以下敬称略）と筆者が雑談し、日本で国際双生児研究会議を開催することを話し合った。帰国後、浅香と今泉は日本での国際会議開催の件で話し合った。その後、井上英二先生に日本で国際会議を開催することをアムステルダムで話し合った旨をご報告したところ、「双生児研究会を作ったらどうですか」とのアイデアをいただいた。早速、9月上旬に数名の双生児研究者らに筆者がご案内状を出し、東京医科歯科大学にて日本での国際会議開催の可能性について話し合った。出席者は井上、岡嶋、天羽、山田一朗と筆者であった。なお、浅香は所用で欠席された。10月に入り天羽、岡嶋、浅香、松井一郎と筆者が設立に向け準備を進め、設立準備会の運営は世話役の浅香、今泉、松井が担当した。第1回の設立準備会は1986年11月29日に出席者17名を得て行われ、第2回準備会並びに創立総会は1987年1月17日に出席者43名を得て東京大学山上会館で開催された。この総会で会長には井上が満場一致で推薦され、次いで幹事には浅香、天羽、井上、今泉、岡嶋、佐藤幸男、中田稔、野中、早川、森本兼囊、吉田啓治の11名が選出された。

##### 2. 第6回国際双生児研究会議

1989年8月にローマで開催された第6回国際双生児研究会議総会で、次回の国際双生児研究会議の開催地が東京に決定した。なお、総会で井上が会長に推挙された。この会議に日本から出席した研究者は井上、浅香、天羽、今泉、大木秀一、中田、早川、又吉国男、山田、吉田であった。ローマから帰国後ただちに、井上を準備委員長とし、日本双生児研究会幹事と又吉、飯島純夫が参加し、国際研究会議準備委員会を発足させ、以下の役割分担で準備を行った。主な役割分担は会長、井上；プログラム委員長、中田；事務局長、今泉；募金委員長、吉田；財務委員長、浅香；ソーシャル委員長、松井；ツインマザーズ担当委員長、天羽；その他の委員は募金委員会で活躍した。なお、事務局の実務担当は学会センターに依頼した。第7回国際双生児研究会議は東京医科大学医学で1992年6月22日～25日に開催され、参加者は230名（国外からは90名）で盛会であった。

##### 3. 日本双生児研究学会

日本双生児研究学会は1993年1月の総会にて、本学会の前身である日本双生児研究会から日本双生児研究学会に昇格した。日本双生児研究会は1987年1月から1993年の1月までの6年間で、会長は井上英二先生であった。1993年の総会で岡嶋道夫先生が学会長として承認された。1995～96年の会長は吉田啓治先生、1997～98年は詫摩武俊先生、1999～2000年は天羽幸子先生、2001～02年は浅香昭雄先生、2003年～現在まで筆者である。

学会の活動は、毎年1月に開催される学術講演会の他に、詫摩会長時代（1997年）から始めた年2回の研究会がある。この研究会は学会会員を中心に、各自の双生児研究業績を1時間かけて詳しく報告し、その後の質疑応答から構成されており、既に23回の研究会を開催した。なお、この研究会が発足前から海外の双生児研究者が来日した際にも、講演をしていただいております。最初の演者はKare Berg教授（オスロ大学）で1987年11月であった。最新の演者はNancy Pedersen教授（カロリンスカ大学）で2005年2月であった。

## ふたご研究事始め

井上 英二

新米医者の私がふたごの研究を手探りで始めたのは、戦後間もない昭和 21 年ごろである。軍隊から戻って大学の精神病学教室で無給副手の生活を始めてから半年ほどが経っていた。教室ではすでに、昭和 17 年から岡田敬三、諏訪望というふたりの先輩が、ドイツの *Gottschaldt* のふたご研究の追試を始めていたし、教室主任の内村教授と吉益助教授が少なからぬ興味を持っていたテーマだったので、私が引き継ぐことになったのである。

ふたご研究をしろといわれても、ふたごに会ったこともない私は、文献を集めたり、本郷近辺の小学校を訪ねてふたごの生徒に会わせてもらったり、教室の隣の脳研究所に来てもらったりして、タッピングや瞬間露出器を使った「形態色彩実験」などの心理実験らしきものから始めてみた。**"Eigentempo"**(個人に固有なテンポ)や形態と色彩のどちらに反応しやすいかという個人差は遺伝的であるというドイツの文献があったからである。そうこうしている内に一卵性のふたごはきわめてよく似ているという強い印象をもつようになった。

微生物や動植物を使う伝統的な実験遺伝学では、交配実験が基本的な研究方法である。しかし人類遺伝学ではこのような研究はもちろん不可能である。ふたご研究はこのような制約の中で、人類遺伝学の最も有力な研究方法の一つであった。ふたご研究の目的のひとつは、さまざまな個人差が遺伝と環境でどのように形成されるかという疑問に答えることであって、そのためにはまず、ふたごの卵性診断の方法を確立しなければならない。しかし当時は正確な卵性診断に基づいたふたご研究は日本には存在しなかったのである。そこで教室の先輩たちは、オランダの皮膚科医の *Siemens* とドイツの人類遺伝学者 *von Vershuer* が開拓した「多元的類似診断法」一名「色素診断法」と呼ばれる経験的な方法を導入していた。この方法は、西欧人では皮膚や虹彩、頭髮の色に個体差が大きく、これらが遺伝的に決定されていることが分かっているから、ふたごの間でこれらを重点的に比較することによって、一卵性と二卵性の鑑別ができるという根拠によるものである。私のひとつの目標はこの方法を発展させ、色素の個人差のほとんどない日本人に適用できる診断法を開発することであった。

諸先輩に続いて私に与えられた研究課題は、人の性格という曖昧模糊としたものが、どのように遺伝と環境によって形成されるのかという恐ろしく困難な課題であった。何十組かの本郷近辺のふたごに会って観察していても、何処から手を付けたらよいかまるで五里霧中であった。一つだけ有力と思われた方法は、生活環境の違う一卵性のふたごのふたりの性格を比較することで、アメリカではすでに初歩的な研究成果が出版されていた。このような研究のための資料を集めるためには、数多くのふたごの集団の中から該当する生活歴をもった者を選び出さなければならない。後に大規模なふたごレジスターに発展した度重なる調査はこのようにして始められたものである。

調査が進むにつれて様々な行動上に問題をもった子供たちが浮かび上がってくる。われわれは精神医学が専門であるから、この子供たちを放っておく訳には行かない。一方附属病院の外来を訪れる患者の中に、次々にふたごの症例が見つかるようになった。この症例と、繰り返し行った全国調査で見つかった症例を念入りに調べ、これが後にてんかん、精神分裂病(統合失調症)、神経症などの精神障害のふたご研究に発展した(註 1)。また正常性格の研究の一部として、一生をほとんど別々の環境で生活した老人の一卵性ふたごのケーススタディーや、別居した小中学生の一卵性ふたごを集めた集団研究など、研究の対象が次第に拡大されていった。その間多くの優秀な共同研究者に恵まれたのはまことに幸いであった。

東大教育学部の附属中学が発足して、研究を目的としたふたごの特別入学を認めるようになったのが昭和 23 年からである。この頃には高い精度で卵性診断ができるようになっており、以後数十年にわたって入学時を中心に附属中学の業務のお手伝いを続けた(註 2)。同時に共同研究を目的として医学部の内科や皮膚科などの教室、理学部や教育学部、文学部などの人たちとともに、文部省の科学研究費による研究班を編成した。この共同研究は昭和 25 年から十数年にわたって継続された(註 3)。その間にもさまざまな困難な問題をひとつひとつ解決しなければならなかった。例えば「似て

いる」と言う現象をどのように客観化するか、という基本的な問題がある。あるふたごの1組の身長が150cmと145cmで、もう1組が160cmと162cmだったら、どちらの方が似ているといえるのか、といった問題である。記号論理学に首を突っ込んだり、統計学の増山元三郎さんを煩わせたりしたのも、なんとかこの問題を解決しようと思ったからである。

ふたご研究の意義に初めて着目したのは19世紀のイギリスのGaltonである。これを発展させたのが戦前のドイツの研究者たちであったが、戦後われわれがふたご研究をはじめたころは、ドイツでは遺伝の研究は全くのタブーだったし、その他のヨーロッパの国でも北欧諸国とイタリアを除いてまだほとんど手がつけられていなかった。ニューヨーク州立大学に呼ばれて1955年にアメリカに行ったのは、われわれのふたご研究の成果を中心とした講義をするためで、アメリカでもこのころは、ふたご研究は断片的な研究があるだけであった。このころの時代的背景はこのようなものだったのである。

60年の昔と現在とでは、ふたご研究の普及ぶりと、世の中のふたごに対する評価はまるで違っている。当時は変わった研究をやっていると見られるのが普通だったし、またふたごに対する迷信と偏見が根強く残っていた。人間をモルモット扱いにしていると非難されたり、さる人から「なんで人の恥を暴くのか」と叱責の手紙をもらったり、突き詰めた表情のふたごの母親から「ふたごが生まれたのは誰の責任ですか」と質問されることもしばしばであった。研究の傍らこれらの誹謗や誤解を解き放すために多くの時間と労力を割かなければならなかった。「双生児」という堅い印象を与える言葉をできるだけ避けて、親しみを感じさせる「ふたご」という言葉を使うように努めたのもそのひとつであり、出演を依頼されてNHKに出かけてゆくこともしばしばであった。中でも文部省の研究費で岩波映画の羽仁進氏と共同で作成した映画「双生児学級」は、劇場でも公開されて好評を博し、ふたごにたいする世の中の理解に大きな貢献をした。ただこのフィルムが今どこに保存されているか明らかでない。

かつての新米医者はどうに引退し、一緒に仕事をした先輩と仲間も多くが鬼籍に入った。追悼の気持ちも込めてふたご研究の裏面史とでもいふべき一文をしたためた次第である。(2006、4記)

註1. 精神分裂病(統合失調症)のふたご研究の経緯は井上英二「私の分裂病研究覚書き」精神分裂病研究の進歩4(1)1993に記載されている。

註2. 東大教育学部における初期のふたご研究の経緯については、井上英二「東大附属における初期双生児研究の歴史」東大附属論集48 2005に講演記録がある。

註3. これらの共同研究の成果の一部は内村祐之編「双生児の研究」1954、および「双生児の研究第Ⅱ集」1956、藤田恒太郎編「双生児の研究第Ⅲ集」1962(日本学術振興会刊)に掲載されているが、いずれも絶版になっている。また毎年刊行された文部省科学研究費による研究班報告書にも記録が残っている。

## 双生児の皮膚紋理を調べて40年

岡嶋 道夫

### 1. 東大附属双生児学級での検査

東京大学教育学部附属中学校が1948年に新設されて双生児学級ができることになり、応募する双生児の卵生診断を行うために私が皮膚紋理の検査を担当することになった。それまでは双生児は私にとっては縁遠い存在と思っていたので、目の前に一卵性双生児の生徒さんがずらりと並んだときの驚きと感動は例えようのないものであった。このようにして私の双生児の検査は始まり、定年を過ぎるまで40年あまり皮膚紋理の採取を続けることになった。

そのおかげで双生児の皮膚紋理に関する論文をいくつも発表することができたが、研究の概要はこの日本双生児研究学会ニューズレター第13号と第22号に発表させていただいた。

双生児学級に応募する双生児の検査は毎年2月、もっとも寒い時期であったので、その前になると体調を崩さないように随分注意したが、発熱を我慢して採取を行い、自宅に帰るのがやっとということもあった。

一卵性双生児は、皮膚紋理をプリントするときに見せる微妙な指の動かし方、あるいは採取に協力する態度も類似しており、とくに足の裏にローラーを当てるときに転げまわるほどくすぐったがる人と平気な人とがいて、その反応の仕方が大変よく似ているのが印象に強く残っている。これを客観的データに変換できたら面白いだろうなといつも思っていた。

## 2. 双生児の皮膚紋理資料

東大附属の双生児の卵生診断は、眼、耳、鼻、口などの頭部顔面の諸形質、全身の人類学的計測、血液型などの血清学的検査、皮膚紋理所見、歯型などを総合して下されたが、このような精密な卵生診断は世界最高レベルのものといえる。双生児を用いた研究発表は世界に数多くあるが、卵生診断は簡略に済まされているものが多い。このような素晴らしい資料で研究ができたことは大変幸せであったが、残念なことに日本人では二卵性双生児の割合が低く、その応募も少なかったため、卵性間の比較にはいつも不自由していた。

被験者の双生児は12歳という発育段階にあったので、手や指は成人より小さかったが、皮膚紋理を構成する隆線は10歳代がもっとも鮮明なので、最高品質の皮膚紋理資料を採取することができた。双生児間の相関係数を調べると、総隆線数（10指の隆線数の合計）は多因子遺伝の典型的モデルといえるような成績を示している。

この年代を過ぎると隆線が磨耗したようになり、鮮明度の落ちてくる人が多くなるが、この傾向は女性に顕著である。東大附属の検査では、最初の頃は両親の皮膚紋理も採取していた。両親といってもまだ若い方が多かったが、それでも双生児に比べると鮮明度はかなり落ちてしまう。そのため母親の指紋では、紋理の分類はできても、隆線の数に正確に数えることができない人が多くなるので、指紋の隆線数を親子で比較することは大変難しい。意外に思われるかもしれないが、隆線数を扱った論文はきわめて数が少ない。

隆線が不鮮明なのは女性本来の特徴なのか、それとも家事労働によるためなのかを考えさせられた。そこで双生児の男女を比較したところ、この年齢の女兒は家事の手伝いをしていないのに、男児に比べると隆線が不鮮明な人が多い傾向が分かったので、環境の影響でなく、本来の性差であると推測された。

## 3. 双生児間の類似と紋様形成

双生児という一卵性双生児の類似に興味集中するが、私の場合は、一卵性双生児がどれだけ違うかということの方に興味移っていった。一卵性双生児を比較すると、隆線の密度などの基本的な性状は大変よく似ているが、対称部位に必ずしも同じ型の紋理が出現するわけではない。紋様形成の発生学的メカニズムと、環境の影響と言われる得体のしれない要素に興味惹かれる。

紋様形成については、指紋、キリンやシマウマの縞模様などがよく例に出されるが、理論生物学者がそのメカニズムを幾何学的、力学的な計算を応用して説明を試みている。魅力的であるが、数学的理論には私の理解力を超えるものがあり、またたとえ綿密な理論であっても、所詮は空想の域を脱しないので、皮膚紋理を眺めて分析するだけでは、紋理形成のメカニズムは仮説に終わるだけと悟った。これに自然科学的根拠を持たせるためには、発生のプロセスを直接観察し、処置を加えることができる実験動物が求められる。サルのような霊長類は皮膚紋理を持っているが、発生学的な研究をするのには残念ながら実用的ではない。

## 4. 動物実験への新しい道へ

皮膚紋理研究がこのような壁に突き当たっていたとき、私に偶然と幸運が重なって訪れ、ラットの手掌の真皮表面に指紋に似た紋理が存在することを発見することができた。この構造は皮膚の表面では見えないので、今まで誰も気がつかなかったが、そこには渦状紋、蹄状紋、弓状紋、三叉紋、梯形紋など多彩な紋理形成が見られた。

ラットには兄妹交配を何十代も継続して作られた近交系が多数存在するので、国立遺伝学研究所や北海道大学の系統保存施設から近交系のサンプルを貰って調べることになった。近交系では親子

兄弟の全個体が同じ染色体と遺伝子をホモの状態を持つので、遺伝学的にみて一卵性双生児と同じであるが、多くの系統ではどの個体も同じ紋理を有していた。ところが別の近交系では、紋理がばらつく現象がみられた。最初コンタミネーションを疑ったりしたが、隆線構造の微細な特徴が類似していること、系統保存は信頼できることなどから、発生の過程に何らかの微妙な差異が生じてばらつくものと考えられた。

二つの近交系を交配して生まれる  $F_1$  では、どの個体も染色体や遺伝子はヘテロになるが、やはり一卵性双生児と同様にどの個体も遺伝学的に同一であるのに、紋理には変異が見られた。これは一卵性双生児に見られる不一致と同じ現象といえる。皮膚紋理は、その部分の解剖学的構造であるパッド（肉球、膨らみ）の発達状況など、各種の未知の要素と関連を持って発現するものと考えられるので、作業仮説を立てて実験を進めてゆけば、メカニズムは徐々に解明されることになる。

私はこの段階で定年退職となったが、世の中は分子や遺伝子レベルの研究の時代に移行してしまったので、以上のような古典的形質への関心は薄らいでしまった。紙とインキで始まった古典的皮膚紋理研究でスタートしたのであったが、途中から実験皮膚紋理学に発展し、形態発生や紋理形成の実験モデルとしての夢を抱かせてくれるようになった。双生児の皮膚紋理に秘められた魅力に惹かれたことが、私を皮膚紋理の研究に留まらせ、実験皮膚紋理学への萌芽につながったわけで、資料を提供して下さった双生児の方々に、心からの感謝を申し上げたい。

文献は日本双生児研究会ニュースレター13号と22号に掲載されているので省略するが、実験皮膚紋理学に興味をもたれる方は下記をご覧ください。別冊も差し上げます。  
岡嶋道夫：偶然と幸運に誘われて実験皮膚紋理学への道. その一、その二、その三. ミクロスコピア 20: 190-195, 2003; 20: 286-291, 2003; 21: 26-30, 2004.

## 日本双生児研究会との出逢い

吉田 啓治

1959年4月、何となく産婦人科に入局した。多分、当時の秦清三郎教授（東大昭2年卒）が、旧全国中等野球大会の甲子園球児であったことへのあこがれや、医局員に大学硬式野球部の先輩（技術的にはかなり未熟）が多数いたことと関連があったかもしれない。

入局後3ヶ月が経ち、初めて当直が割り当てられ、早速分娩に立ち合うことになった。最初の出産で、元気な赤ん坊が生れてきたが、妊婦のお腹がまだ異常に大きいので、子宮底を少し圧迫すると、驚いたことにもう1人の死産児が胎盤とともに排出した。超音波機器のない当時の産科では、多胎の出生前診断は極めて難しく、古い産科医は誰でも2人が出産してはじめて双子と判り、とても恥ずかしい思いを経験している。イギリス元首相サッチャー氏も出産直前まで双子の診断がついていなかったことは産科界では有名な話である。今、振りかえれば、私の最初の出産立ち合いが双胎の一児死亡例であったのは、その後の研究内容からみると、将来を暗示していたものようである。

医局生活も6ヶ月を過ぎると、何か先輩の研究を手伝う習わしがあった。そのうち、自分の研究テーマも見付けなければならぬ。しかし、同じ様なテーマでは物足りないので、なるべくお金のかからない（当時、研究費の割り当ては微々たるもので無に等しかった）研究はないものかと思案していた。

その頃には、出産とともに娩出される大量の胎盤は、日本では業者にお金を払って焼却してもらっていた。しかし、欧米の産科病院では、出産直後の胎盤を産科医、小児科医または病院医が綿密に検索した後廃棄されることを知り、文献を頼りに観察すると、いろいろな興味ある所見が得られた。

例えば、双胎出産の頻度は人種により大きな差があり、その頻度差は二卵性双胎の頻度によるとされている。すなわち、一卵性双胎の頻度は人種差がほとんどないことになる。一般に多胎の卵性診断には多くの時間、労力、経費を要する。しかし、胎盤検索で簡単に卵性診断ができることもある。一絨毛膜性胎盤が確認できれば一卵性と診断して差支えないであろう。最近、一絨毛膜性二卵性双胎の報告もあるが、検索方法に疑問をもつものもある。

一方、一絨毛膜性双胎（多胎）の中には、双胎の一児が早期に胎内死亡を来し、単胎の如く出産する症例も少なくない。また、一絨毛膜性双胎では、ほとんどの例で双胎間で胎盤内の血行吻合を有している。その場合の吻合型式によっては胎児異常（発育差、奇形、胎内死亡など）の頻度が異常に高い。これは胎盤の病理学的検索を注意深く行うことによりその原因を見出しうることもある。卵性の人種差と同様、胎盤内血行吻合の型式や胎児異常の発生にも人種差があると考えられる。産科医としては重要かつ興味ある問題である。

このような症例がある程度集まったところで、日本産婦人科学会に提案したが、1970年代には我が国では全く関心を示されなかった。その頃、国際双胎研究会議の存在を知り、1983年ロンドンでの第四回大会に演題を提出し参加した。

そこには、多くの日本からの研究者が出席していることに驚いた。それもいろいろな分野の専門家の方々であった。医学に限らず、心理学、教育学、公衆衛生学さらに双子のお母さんの会と多士済々、帰国後も研究会で一緒に過ごす機会も多く、益々多胎の研究に興味を深まり勉強になっている。医学においても、人類遺伝、公衆衛生、環境問題、成長発育、母子保健、精神医学等々、実に多彩な研究が進められており、この出逢いは私にとって未知の世界に引き込まれるようで、以後の研究にも大いに励みになっている。とくに、年々発展する補助生殖医学による多胎の出産が増加している現在、その従事者のみでなく、いろいろな方面からの議論が必要である。

願わくば、もっと多くの産婦人科医、小児科医がこの研究に参加することを望むものである。

## 1995年—1997年

### 詫摩 武俊

私が日本双生児研究学会の会長を務めたのは1995年（平成7年）から97年（平成9年）までの2年間である。

この当時も現在と同じように毎年1月中旬に双生児研究学会が開催されていた。しかし年に一度の学会では発表時間も質問時間も短く制限されている。そこで発表時間を60分、質問および討論の時間を60分くらいとし、お互いに寛いだ気持ちで双生児に関する研究を重ねたらどうかと私は考えた。これを双生児研究会と名づけ第1回を1995年6月17日JR高田馬場駅近くのFIビル6階の東京国際大学国際研究所で開催した。ここの30人くらい入れる会議室を利用した。黒板はあるがマイクの設備もない落ち着いた感じの部屋であった。この研究会の第1回目の講師は岡田敬蔵氏、演題は「双生児をめぐって」であった。

講演は1942年（昭和17年）に軽井沢で小学校4～5年生の男子双生児11組と13日間生活を共にして研究した内容が主であった。この研究は東大精神科の内村祐之教授の指導と支援を得、1936年にゴットシャルトがドイツで行った研究から示唆を受け、工夫を重ねたものである。これはわが国で戦前から昭和30年頃まで沼津、山中湖、野尻湖などで行われた双生児合宿研究の発端となったものであった。なおこの研究会には当時小学生で被験者として協力してくれた河村望氏（東京女子大学教授・社会学）も招き、50年あまり前を振り返って発言して頂いた。この双生児研究会は現在も三田の慶應義塾大学を会場として年に2回開催している。

20年前、30年前と比べると学会そのものが細分化され専門化されてきた。たとえばかつての日本心理学会から教育心理学会、社会心理学会、発達心理学会などが分かれ何々心理学会という名称の学会が30くらいある。医学、教育学、文学に関する事情もほぼ似ているであろう。家族学会、人

類遺伝学会という学会も設立されている。研究者は自らの研究成果をどの学会で発表すれば自分自身の今後の研究に役立つかを考えるのである。またわが国の現在の家族の状況を考えると双生児の父親、母親がふたりの子どもをどう育てて行ったらいいか、どこに援助を求められるか、という切実な問題がある。さらに双生児を研究対象として考える場合にプライバシーに関わる問題もある。

日本双生児研究学会はこれから取り組んでいかななくてはならない大きな問題をもっているのである。

## 双生児と私

天羽 幸子

双生児の研究に関わってから指折り数えると 54 年になります。その間に研究するばかりでなく、私自身が双生児の母親になり、多胎児のお母さんを支援するツインマザーズクラブを設立して 38 年、私は本当に双生児と縁のある毎日だったとふりかえています。

双生児に出会うことになったのは、東大付属が双生児を 1 学年の 1/3 入学させ、双生児研究を始めということからでした。大学を出たばかりで双生児研究について何も知らない私が、内村祐之先生を中心に井上英二先生がまとめておられた学際的な双生児研究にふれることができたのです。毎年東大でひらかれた研究発表会ほどの領域をとっても興味深いもので、日本学術振興会によって出版された 3 冊の「双生児の研究」は双生児を対象に、研究者が心を一つにしてまとめた熱意が伝わってくるようなものです。

心理学の分野ではドイツのゴットシャルトが行った研究の追試や知能検査による卵性別の研究が数多く行われました。東大付属では行動観察や家庭訪問を中心にした性格形成と家庭での扱い方などの研究が付属学校の先生方と研究者が協力して実施されました。当時は家長を中心にした家族制度はなくなっても、家庭内でのきょうだいによる扱い差は残っており、双生児間のきょうだいの性格差異の研究として大変充実したものができました。また卒業生の協力による中高年の双生児研究など、世界でただ一つ双生児を入学させている学校ならではの数々の研究がまとめられました。



【天羽邸でのパーティーの記念写真】  
(左端が D.キース氏、右から二番目がブライアン氏)

ちょうどその頃、国際双生児研究会議を東京で開催しようという気運がもりあがり、私も第 6 回のローマの学会にはじめて参加し、この学会が研究者ばかりでなく、双生児の母親たちも参加することを知りました。1992 年 6 月東京医科大学で開かれた第 7 回大会は井上先生を大会長として、発表数も多く、大変盛会でした。COMBO (Council of Multiple Birth Organization) という多胎児を持つ親の世界的団体の一つとして日本のお母さんたちが 5 人もポスター発表しました。私としては前回のローマ大会で普通のふたごのお母さんたちの子育てのなやみなどを知らなかったのですが、それは実現しませんでした。そこで日本では是非日本のお母さんたちが外国の代表者たちと交流し、お互いの意見を交換してほしいと考え、昼休みの時間を利用して、私の家を開放し、料理を持ち寄りホームパーティーをしました。16 人の外国のお母さん代表や研究者が参加してくださり、総勢 60 人、短い時間の中で、ゆかたを着ていただいて写真をとったり、たいへんなごやかなものでした。その後、何回か国際学会に出席すると、「ゆきこ、あの時は楽しかった」と声をかけてくださる方が多く、ツインマザーズクラブのお母さんたちにも、大変有意義なことだったと思っています。

1999年から2001年まで双生児研究学会の会長を務めさせていただき、子育てワークショップを始め、その後も学会の開催のたびに継続されています。私は研究発表と育児支援の意見の交換については時間的に並行して行いました。二つを一緒のプログラムの中で行いたかったのですが、研究発表の時間を少なくすると、その内容をきちんと理解することはむずかしく、またお母さんが意見を出しあうにも別のプログラムのほうが効果的ではないかと考えました。育児支援の必要性はいつも肌で感じている私ですが、そのお母さんたちは地道な双生児研究から得られた成果を求めています。

大木秀一先生などによる双生児の出生時体重の研究、そして新しくスタートを切った安藤寿康先生たちの研究に期待しています。

私たちはパイロットスタディをして、大きい集団での研究に少しでも役立つことができると考えているところです。

## フランシス・ゴルトンと美人地図

浅香 昭雄

この話は、「一冊の本」(朝日新聞社刊)の2005年11月号に端を発する。その中に、「美人学入門」という特集記事があり、三氏が文を寄せている。林真理子、千崎学(棋士・八段)、竹内久美子(動物行動学研究家)の三氏である。内容は、実質的には近刊(2005年11月)予定の酒井順子著「私は美人」の書評となっている。

この中、竹内久美子氏は、「著者は最後に『日本海美人一県おき説』を検証すべく、旅に出、美人の出現率をカウントする。こういう研究の元祖は、チャールズ・ダーウィンのイトコにあたる、フランシス・ゴルトンで、イギリス各地における美人出現率を調べ、美人度マップなるものをつくっているのだが、以後なかなか後を継ぐ人が出て来なかった。

この調子で是非、酒井さんには女オタク道(もちろんいい意味で)を極めてもらいたいと思っている。」と結んでいるのであった。

「美人度マップ」なるものが気になったので、原著論文ないし引用文献を知りたい旨、編集子に問い合わせたところ、メールで返事をいただいた。竹内久美子氏にも、尋ねてくれたらしい。(1)「フランシス・ゴルトンの研究」(ナカニシヤ出版)が入手しやすく、詳しいのでは、と。(2)「優生学の名のもとに」(朝日出版社)の原著には、参考文献が載っている。訳書のほうには、掲載がない、というふたつの文献情報を得ることが出来た。

(1)は、岡本春一著で、実際には教え子達が、岡本氏の死後、編者となって、1987年に出版されたものである(292頁)。岡本氏は明治31年4月出生、京大文学部哲学科を卒業し、昭和39年4月岡山大学教授を定年退官し、昭和60年5月に逝去されている。

(2)は、正確にはDaniel J. Kevles(ケブルズ)の *In the Name of Eugenics: Genetics and the Uses of Human Heredity* (Knopf, 1985) で、1993年に「優生学の名のもとに一人類改良の悪夢の百年」(西俣総兵訳、朝日新聞社、529頁)なる訳書の出ていることが分かった。あるサイトによると、引用の多い有益とされるこの本は現在絶版で入手困難であり、公的図書館等でしかみられないであろう、とあった。そこで、山梨県立図書館に問い合わせ、蔵書としてあることを確認したが、ネットを根気よく調べ、ともかく訳書は入手することができた次第である。前出のサイトには、eugenicsの語は、1883年にイギリスのF. ゴルトン Francis Galton が初めて使った、云々という記載も出ており、優生学の問題を突っ込むのには役立ついいサイトである。このケブルズの原著も後に、結局紀伊國屋webで注文し取り寄せるはめになった。

さて、双生児研究に携わる者のゴルトンに対する平均的な普通のイメージは以下のようなものではないだろうか。

(浅香昭雄「双生児研究法の原理とその応用」老年精神医学 Vol.4 No.4, 1987 より引用)

.....

双生児研究法の創設者は、Sir Francis Galton (1822～1911) といわれている。Galton は、1876 年に双生児に関する論文を発表し、ふたごは、“nature vs nurture” (氏と育ち) の相対的貢献度を測定するにはよい方法であると報告している。“nature vs nurture” は Shakespeare の “Tempest” のなかで、Prospero が Caliban についていった言葉 ‘A devil, a born devil, on whose nature nurture can never stick’ からとられたものだという。Galton は、この時代にあってももちろん一卵性と二卵性の双生児を厳密に区別はしていないのであるが、出生時よりよく似ている双生児とあまり似ていない双生児について、育ちの影響を詳しい質問用紙を用いて観察している。彼は、子供のときと青年時代にとってもよく似た双生児が、何年も一緒に教育を受けたにもかかわらず、その後似なくなったとき、その不一致をもたらしたものを追及すれば、育ちすなわち環境の影響を知ることができると考えた。逆に、子供のときに似ていなかった双生児が、同じような環境下で後になって、似てきたとき、その環境を分析すれば、似てきた原因を突きとめられると考えた。すなわち、今日でいう双生児研究法の原理を思いついていたことになる。

彼は、よく似ている双生児 35 組について詳細な生活歴をとったが、その中でいくつかの挿話を記録している。ある 1 組の双生児の似方は、次のようなものであった。すでに中年に達したふたごの一人からの便りによると、「A は再びインドからの帰途にありましたが、船が予定の到着時間より数日を過ぎてはまだ着きませんでした。ふたごの兄弟の B は、A を迎えるべく、自分の住居を立ててきていました。彼らの年老いた母親は、とても心配していました。ある朝、A が突然飛び込んできて、いいました。“やあ、お母さん、ご機嫌いかがですか”。彼の母は、こう答えたのです。“おお、B よ、悪い冗談はやめておくれよ、私がどのくらい心配しているか知っているくせに”。A が本当の A であることを母親に納得してもらうまで、だいぶ時間がかかったのです」。

Galton は、似ていない双生児についても、調査の開始の時点ではまだそれほど思っても見なかったが、双生児の中ではこちらのほうがもっと重要であると告白しているくらいである。また、確かに聖書に出てくる Esau と Jacob のように、似ていない双生児は存在し、極端に似ていない双生児も、酷似している双生児と同じ程度の特異性を持っていると述べている。似ていない双生児 20 組を調べた結果、同じ環境下にあっても少しも似てこない双生児のあることを述べている。ある親は、次のように述べている「二人とも、生まれてから今日までまったく同じ育て方で育ててきました。二人とも、健康で丈夫です。しかし、彼らは二人の別々の少年のように身体的にも精神的にも、感情反応までもまったく違うのです」。その他のいくつかの実例をあげて、Galton は、nurture は教育とか職業訓練などを超える以上のものについて、無力なのであろうかと疑問を提出している。似ている双生児と同じ結論が、似ていない双生児についてもいえるのではないかとし、ごくありふれた環境では、nature のほうが nurture より影響があるのではないかと結論づけている。ただし、演繹的に応用されることには警戒的で、統計的な解析を待つとの意向を明らかにしている。

.....

ところで、サイトを検索中、有名人のゴシップ集ともいべき記事に、フランシス・ゴールトンのそれがあつた。引用するのが若干憚られる内容であるが、次に挙げておこう。

.....

「英国美人地図をつくったダーウィンのいとこ / 〈フランシス・ゴールトン〉」

進化論で有名なダーウィンには、フランシス・ゴールトンという、やはり科学者のいとこがいた。このゴールトンは、すぐれた科学者だったが、それ以上にアブナイ人格の持ち主だった。

彼は、測定したり、統計をとったりすることにこだわり、アフリカ女性の美しい体格を賛美して、巻き尺で測定して統計をとろうとした。が、当然ながら、誤解を受けたため、六分儀を使って、離れたところから女性のバストとヒップをはかる方法を考案した。

また、彼は、母国のイギリスでも、女性の統計研究を行った。あちこちの街をうろつき、少女とすれちがうたびに、「美しい」「まあまあ」「醜い」の三段階に分けて統計をとり、英国美人地図をつくった。それによると、英国一の美女の産地はロンドンで、その逆はアバディーンという統計結果がでたそうである。

こういうチカンと紙一重の研究より、ある意味でもっとアブナイのが、彼の優生学の研究だった。彼は、好みによって結婚するのではなく、遺伝的に“すぐれた”人間を産むために結婚して子どもをつくるべきだと主張し、子どもを産む権利は、上流階級の人々だけに制限されるべきだと提案し

た。ふつうの人は中年期にやっと結婚が許され、精神障害者や犯罪者は、隔離して、生殖を厳重に禁じるべきだと主張したのである。

彼の説は、その後、ニーチェに受け継がれ、ナチスドイツでは政治色がついて、一部実行され、もっとアブナイものとなったのだった。

……

このゴシップ的文章は、ゴールトンの名誉を傷つけるとは思わないが、前半の「英国美人地図」の記事は一般のイメージとは若干ギャップがあるようにも思える。やはり原著の該当部分を探してみる必要があるだろうか？

(1) の岡本春一著「フランシス・ゴールトンの研究」の序に相当するところで、著者は「I 序ならびにフランシス・ゴールトンの業績研究資料について」という章で、「かくして現在本邦に所在する資料 1, 2 はほとんどその全部を渉猟し得たかと考えている」、と述べている。資料 1 というのは、彼の分類によれば、本人の著書、資料の 2 というのは本人の著作論文で生前学会報告書、紀要、雑誌、新聞等に発表のもの、ということになる。なお、この著書の弟子らの(編者注)として、著者(岡本氏)が本稿を完成されたのは昭和 36 年(1961 年)3 月であるが、1969 年以後、10 数回も渡英され、資料の確認と収集に従事された。研究の引きつぎが切望される、とある。

岡本氏はゴールトンの著書として、15 著書をあげており、未見のものは書名を書いた上で 2 つとしている。ゴールトンの論文及び関係記事を含む雑誌を分類して、16—36 の番号を附し、年代順に 16〇〇、36〇〇と通し番号をつけている。後人の著作、編纂でゴールトンの作を引用所載している書籍として、37、38 をあげている。他国語に訳されたものとして、39、40 をあげ、40 は原口鶴子訳、天才と遺伝、大正 5 年と記されている。伝記の項を載せているものとして、41—47 をあげ、46 は駒井卓、遺伝学叢話、昭和 19 年となっている。論文の目録として、前述したように、論文を雑誌別(2 桁)、年代順に並べ、各々に番号、年代、巻、頁、題目が記されている。その数は膨大であり、同書の 16—60 頁にわたっている。

さて、件の美人度マップのことについて、岡本春一氏がどのように紹介しているかを、探してみた。「II フランシス・ゴールトン略伝」の 68 頁に、「一見したところ全く質的差異であり測定出来るとも思われぬ事柄をも測定しようと心掛けるのがゴールトンの趣味であつたらしく、一派の人々から念の入った冗談と思われつつも測定に努力し、しかもおおむね成功している。測定は科学の核心である。ゴールトンは常に新たなる領域に対して科学的研究を実施した人である。英国及びスコットランドの美人地図(資料 14: 315—316 頁)を画いて一般人の中における美貌の分布を示したり、一群の人々各員が公平平等な印象を残す複合写真 composite portraits を工夫して、家族や病種による代表的な顔を見せたり、あるいは又個人の顔の中から共通の要素を消去してその特色のみを残す事をも試みた。」と書かれているのを発見した。大変好意的な内容とお見受けした。資料 14 というのは、Memories of My Life, with eight illustration. 1908 (著者は、思いでの記と訳しているが、要するに自叙伝である)に出ている。CHAPTER XXI RACE IMPROVEMENT (310—323 頁)の 315—316 頁にある文章で、それは以下の通りである。

I may here speak of some attempts by myself, made hitherto in too desultory a way, to obtain materials for a "Beauty-Map" of the British Isles. Whenever I have occasion to classify the persons I meet into three classes, "good, medium, bad," I use a needle mounted as a pricker, wherewith to prick holes, unseen, in a piece of paper, torn rudely into a cross with a long leg. I use its upper end for "good," the cross-arm for "medium," the lower end for "bad." The prick-holes keep distinct, and are easily read off at leisure. The object, place, and date are written on the paper. I used this plan for my beauty data, classifying the girls I passed in streets or elsewhere as attractive, indifferent, or repellent. Of course this was a purely individual estimate, but it was consistent, judging from the conformity of different attempts in the same population. I found London to rank highest for beauty; Aberdeen lowest.

一方、(2)の「優生学の名のもとに」(訳書)では、その 23 頁に「対象物の数を勘定する彼の癖が内心の苦悩によってますます強まったのは疑いない。目に見えない人間の内心を奥深く探ることは、自己認識をさらにおし進めて自分の精神状態を危うくする恐れがあった。その点 人間の特徴を一つひとつ数え上げることは、人間の持つ現象的側面を探るにとどまり、観察者と被観察者の内

心を隔てながら、しかも計測可能な一つの壁をつくる役割を果たす。ゴールトンが hottentot の女性を六分儀で計測する対象と見なしたのはこうした理由からだった。その数十年後に彼はイギリスの各都市で見掛ける魅力的な女性の頻度を記録して「美人分布図」を作成したこともある。彼の結婚生活は愛情よりもむしろ社会的、知的交友関係を維持するために築かれたといってもよいだろう。……」とある。訳書では、引用文献が省かれているので、元の引用出典は不明である。そこで、原書の *In the Name of Eugenics* の該当部分をみると（12頁）、

「Galton's propensity for counting was no doubt reinforced by his inner turmoil. To plumb intangible human depth was to risk self-perception. To enumerate human characteristics required no penetration beneath the phenomenological surface and established a wall of numerical objectivity between the observer and the forces of heart. Thus Galton reduced Hottentot women to measurement with a sextant. Thus, a few decades later, he constructed a "beauty map" of Britain noting the frequency with which he saw attractive women in various towns. His marriage seems to have been built on social and intellectual companionship rather than on passion.」であり、このパラグラフ中の引用文献は示されておらず、この前のパラグラフの引用文献番号38から、後のパラグラフに係わる文献番号39に飛んでいる。したがって、"beauty map" の原典を探すことは不発であった。

小生の原典探しは、前出の *In the Memories of My Life* 中に見出すことでおわたるのであるが、これのきっかけは鈴木氏の著書が与えてくれた。実は、「II フランシス・ゴールトン略伝」（61頁-74頁）に引用があるとは思わずに、「III フランシス・ゴールトンの学術的研究著作について」（75頁-188頁）の詳細な著書、文献等の紹介にあたっていて、発見が遅れてしまった、のがその経緯である。しかし、岡本春一氏のフランシス・ゴールトンへの傾倒振りが思い知らされ、頭の下がる思いであった。

ゴールトン自身も *Memories of My Life* において、"beauty map" について簡単に触れているだけでそのもとの出典を明らかにしていない。ケルプスの *In the Name of Eugenics* においても、然りである。ただ、a few decades later（数十年後と訳されているが）"beauty map" 云々と出ており、ケルプスはその原著を読んだ形跡が伺われる。ゴシップ記事にしても、もっと詳細に書かれており、全くのでっち上げとも思われない。鈴木氏の1969年以降の収集にそれが入っている可能性もある。が、その詮索はやめにして、この辺で引き上げるのが得策というものであろう。

"beauty map" を追いかけている途上で、ゴールトンの原書あるいは彼をテーマにした著書をいくつか手に入れる羽目になった。*Finger Prints* (1892) もそのひとつであるが、これは岡本氏がその最終講義のテーマとしたことが、彼の著書のなかで紹介されている。指紋を少し研究した者として、未読であったのは恥ずかしい思いである。

ゴールトンあるいは優生学をキーワードにしてネット上で検索すると、たくさんの有益な情報が得られる、ことを知った。「優生学の名のもとに」はとっつきがたく難解な書物であるが、優生学を志す者にとっては、必要欠くべからざる書物であるとの評が、多くの人から寄せられているが、同感である。

なお、*Memories of My Life* は <http://galton.org/books/memories/> から pdf ファイルとして入手可能である。

## 平成 18 年度 日本双生児研究学会 第 1 回幹事会議事録

日時：平成 18 年 1 月 28 日（土）12：05- 13：00

場所：和光大学

出席者：（敬称略 あいうえお順）浅香昭雄、安藤寿康、今泉洋子、大木秀一、志村恵、杉浦祐子、野中浩一、早川和生、又吉國雄、横山美江

欠席者：小野寺勉、加藤則子

議題：

### 1. 平成 17 年度の活動報告

#### 1) 第 21 回研究会、第 22 回研究会について

第 21 回研究会 2 月 12 日（土）慶應義塾大学三田キャンパス

Nancy Pedersen（カロリンスカ大学教授）「The Swedish Twin Registry -Past, Present, and Future」

第 22 回研究会 11 月 5 日（土）慶應義塾大学三田キャンパス

杉浦祐子（ツインマザーズクラブ）「電話相談による多胎児の育児支援」

#### 2) ニュースレターについて（第 37 号、第 38 号の刊行）

第 37 号を 8 月、第 38 号を 12 月に刊行した。

#### 3) 会員状況報告

現在の会員数 157 名。

### 2. 平成 17 年度の会計監査報告

下記の通りの報告がなされ、承認が得られた。

### 3. 第 20 回学術講演会について

大会長の野中浩一会員（和光大学）により報告があった。

### 4. 平成 18 年度の活動状況

#### 1) 第 21 回学術講演会（国立保健医療科学院・加藤先生）の準備状況について

大会長の加藤則子会員の代理として野中浩一会員により、2007 年 1 月 27 日（土）に国立保健医療科学院で開催される旨の報告があった。

#### 2) ニュースレターについて

第 39 号は 20 周年特集号として刊行することが決定された。原稿の締め切りは 2006 年 3 月 31 日。原稿の一部は、元学会長、幹事ならびに名誉会員が分担執筆するが、会員からも原稿募集を行う。編集は志村恵会員が担当する。第 40 号は、12 月号として刊行予定である。

#### 3) 第 23 回研究会、第 24 回研究会、第 25 回研究会について

##### 1) 第 23 回研究会

講師：菊池白（上尾中央総合病院）

平成 18 年 5 月 27 日（土）慶應義塾大学 三田キャンパス

##### 2) 第 24 回研究会の講師は、志村恵会員（金沢大学）、志村真会員（中部学院大学短期大学部）、能登佐会員（石川県立中央病院）、三橋俊夫会員（東京大学教育学部附属中等教育学校）が予定されていることが報告された。

##### 3) 第 25 回研究会の講師は検討中である旨の報告がなされた。

### 5. 第 22 回学術講演会（2008 年）の開催地について

横山美江会員（岡山大学大学院）が大会長の候補として挙げられた。

### 6. 平成 18 年度の予算計画について

事務局の作成した原案にしたがい、以下のように決定された。

### 7. その他

これまでの学術講演会で発表された研究成果をまとめた本を出版する案等が提案された。

## 平成 18 年度第 2 回日本双生児研究学会幹事会

日時 平成 18 年 5 月 27 日 16:00～17:00

場所 慶應義塾大学三田キャンパス西校舎 513 番教室

出席者：(敬称略 あいうえお順)

安藤寿康、大木秀一、加藤則子、志村恵、杉浦祐子、又吉國雄、横山美江

欠席者：浅香昭雄、今泉洋子、小野寺勉、野中浩一、早川和生

議題次第：

1. ニュースレター編集について

1) 第 39 号(特集号)については、特集号の企画として予定されているすべての元会長からの寄稿があったことが報告され、掲載記事内容が確認された。刊行は7月上旬が予定されている。

2) 第 40 号について、掲載記事内容に関する提案と確認が行われた。

2. 学術講演会準備状況

大会長の加藤則子会員(国立保健医療科学院)により準備状況についての報告があった。

3. 2007 年春の第 25 回研究会講師について

又吉國雄会員に依頼し、承諾された。

4. 新幹事の選挙について

1) 選挙管理委員長に杉浦祐子会員、選挙管理委員に村石幸正・加藤則子会員が推挙された。

2) 選挙人名簿の作成を事務局と選挙管理委員とで行い、11 月中・下旬に開票作業を行うことが確認された。開票は東京大学教育学部附属中等教育学校にて行う予定。

5. 2006 年秋の第 24 回研究会について

学会開設 20 周年を記念して企画される双生児本人によるパネルディスカッションのパネラーを、志村恵会員(金沢大学)、志村真会員(中部学院大学短期大学部)、三橋俊夫会員(東京大学教育学部附属中等教育学校)らに依頼すること、志村恵会員が司会、ならびに事前のテーマ設定のための意見調整をおこなうこと、遠方在住者には交通費を支給すること、録音とその活字化を行ってニュースレターに掲載することが承認された。

### 日本双生児研究学会 平成17年度(2005.1.1～2005.12.31) 会計収支報告

収入		支出	
前年度繰越	¥1,917,625	研究会謝礼	¥40,000
会費納入	¥433,000	講演者交通費	¥0
平成13年度分 2	¥6,000	事務・消耗品費	¥16,170
平成14年度分 3	¥9,000	会議費	¥11,550
平成15年度分 8	¥24,000	ニュースレター編集費	¥27,000
平成16年度分 21	¥63,000	ニュースレター印刷費	¥15,608
平成17年度分 99	¥304,000	事務局人件費	¥55,000
(法人会費を含む)		通信費	¥58,370
平成18年度分 8	¥24,000	第20回大会開催費援助費	¥100,000
平成19年度分 1	¥3,000		
受け取り利息	¥73	支出合計	¥323,698
		次年度繰越金	¥2,027,000
<b>合計</b>	<b>¥2,350,698</b>		<b>¥2,350,698</b>

監査

菅原 まゆみ

村石幸正

日本双生児研究学会 平成 18 年度(2006. 1.1～2006. 12.31) 会計予算案

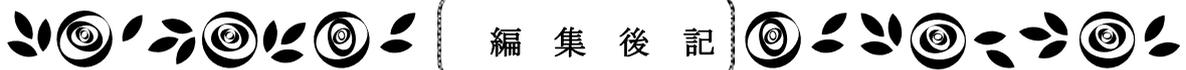
収入		支出		
前年度繰越	¥2,027,000	研究会謝礼	¥50,000	¥10,000*(1+4)人
会費収入	¥375,000	講演者交通費	¥45,000	¥15,000*3 人
105 人(157*0.65)*¥3000	¥315,000	事務・消耗品費	¥10,000	
過年度分(15*¥3000)	¥45,000	会議費	¥30,000	
利子	¥50	ニュースレター編集費	¥90,000	
		ニュースレター印刷費	¥25,000	
		事務局人件費	¥70,000	
		通信費	¥50,000	
		第 20 回大会開催費援助費	¥100,000	
収入合計	¥375,100	支出合計	¥470,000	
		次年度繰越金	¥1,932,100	
合計	¥2,402,100		¥2,402,100	

## 次回研究会のお知らせ

### 創立20周年記念シンポジウム「ふたごが語るふたご」

2006年12月9日午後1時半から3時半まで  
慶應義塾大学三田キャンパス西校舎519教室

パネリスト：三橋俊夫、杉本昌子、田頭直子、志村真、志村恵（司会）



### 編集後記

#### 編集後記

日本双生児研究学会は、おかげさまで学会創立20周年を迎えることになりました。この20周年を記念いたしまして、歴代の日本双生児研究学会学術講演会の会長を歴任していただきました先生方からご寄稿いただき、2006年6月のニュースレターを20周年記念特集号として編集いたしました。ご執筆いただきました先生方には心から御礼申し上げます。また、記念特集号の編集にあたりましては、志村恵幹事（金沢大学）に多大なご尽力を賜りましたことを申し添えさせていただきます。日本双生児研究学会がさらに発展することを願いつつ、特集号を終えさせていただきます。

岡山大学 横山美江